

発達特性への正しい理解と子どもの育て方についての講演会

R1 7月12日(金)

育友会広報部・記



外では蝉が元気に鳴き始め、日に日に暑さが増すなか、『発達特性への正しい理解と子どもの育て方についての講演会』が開催されました。

当日は50名を超す、多くの方に参加いただきました。

講師に尼崎総合医療センター小児科医師(児童精神)の石原剛広先生を招いて、発達特性の正しい理解と、子どもの特性をふまえた伸ばし方や、関わり方についてのお話を伺いました。



偉人と特性

『発達特性』について学ぶ前に、実は俗に言う『天才』と呼ばれる人達も、何かしらの『発達特性』がある人達が多いと石原先生は言います。

音楽家・ベートーヴェン



【特性】 自分の信念を貫く。 → **表** 一切の妥協を許さない孤高の音楽家。

【弱点】自分の信念を貫くあまり、社会との折り合いがつかない。 → **裏** 頑固者。トラブルメーカー。

このように、**発達特性**というのは『**表(良く言えば)**』と『**裏(悪く言えば)**』が一体となっています。ベートーヴェンを、ただの頑固者としてみるか、孤高の音楽家としてみるかは、受け手次第なのです。

発明王・エジソン



【特性】 知的好奇心が旺盛。 → 発明家として一番大切な要素を持つ。

【弱点】なんでも『知りたい!』と思うと、行動にうつさずにはいられない。 → 問題行動が多発する。

(例) **エジソン 納屋全焼**

度重なる問題行動を起こすエジソンに、学校は彼を退学処分にした。つまり、エジソンは学校へ通っていないのです。それなのに、なぜ偉大なる発明王になりせしめたのか？

答えはエジソンの母親が、彼の良き理解者であったからです。常に心の居場所を与え、問題行動を起こしても、とがめることはなかったそうです。

このように、**発達特性**は『**環境によって良し悪しが左右される**』ということが分かります。

偉人たちの『発達特性』についてみてきましたが、その視線を今一度子どもに向けてみてほしいです。「何をやっているの? ダメ!!」と怒ってきたことも、実は特性からくる言動だったのかもしれない。

みんな困っている！？

主な発達特性として3つ挙げられます。

- ①注意欠陥・多動性障害 (ADHD)
※多動性障害については、年齢とともに落ち着くようになるが、片付けられない等の特性は残る。
- ②自閉症スペクトラム症 (ASD)
- ③学習障害 (LD)



これらの言葉を一度は耳にしたことがあるとは思いますが、**大事なのはここから！**

『これらの特性のある人は、みんな困っているのだろうか？』という疑問です。

結論からいうと、ずばり **『NO！！』**

え？？みんな困っているワケじゃないの？

発達特性の統計値によると、25%程度が特性を有しているとありました。そのうち、生活するうえで『特性が強すぎて困っている人(患者として医療機関にかかっている人)』は約10%程度です。

では、残りの約15%の人はどうなっているのかというと、実は『**特性はあるが、生活するうえでさほど困っていない人**』が、これに当たるというのです。いわゆる**グレーゾーン**と呼ばれる人達です。

グレーゾーンを有している子たちは、乳幼児健診で基準を通過してしまうため、受診することなく、大人になることも少なくないそうです。しかし、大人になるにつれ『**生きづらさ**』を感じ、その原因が『**特性**』によるものであったと、その時はじめて気付く場合も多くあるとのことでした。



環境がカギです！

では、人が『**生きづらさ**』を感じ、困る時とはいったいどんな時なのでしょう？

その問いについて、石原先生は「まさに『**環境**』がそれを左右しているのです！」と力強く言われました。

(例)

特性が強い
環境が良い

うまくいく。



特性が弱い
環境が悪い

困る。生きづらい。



たとえ、特性が弱くても『**環境が悪い**』と生きづらさを感じてしまう。

特性を持った人でも困らない人がいたのは、『**環境**』がその人をまもっていたからなのかもしれません。『**環境**』というのは、当事者が安心していられる場所です。寢床ではありません。

居心地の悪い環境では、たとえ特性を有していない人でも生きづらさを感じ得ずにはられません。

特性を有している人も、有していない人も、ともに気持ちよく暮らしていくにはどうしたらいいのか？

石原先生オススメの方法を以下に紹介します。

『怒らない』ススメ

『さっき注意したばかりなのに、またやっている』や『何年もかけて、同じことを叱っている』という経験はありませんか？

『特性』のある子は、注意しても、叱っても、行動を修正することが難しいんですよ。怒るだけ無駄なんです。」と石原先生。

こんな時は **『怒るのをあきらめるのがオススメです！』**

実は怒る回数を減らすことが良質な環境作りにつながるのだそうです！

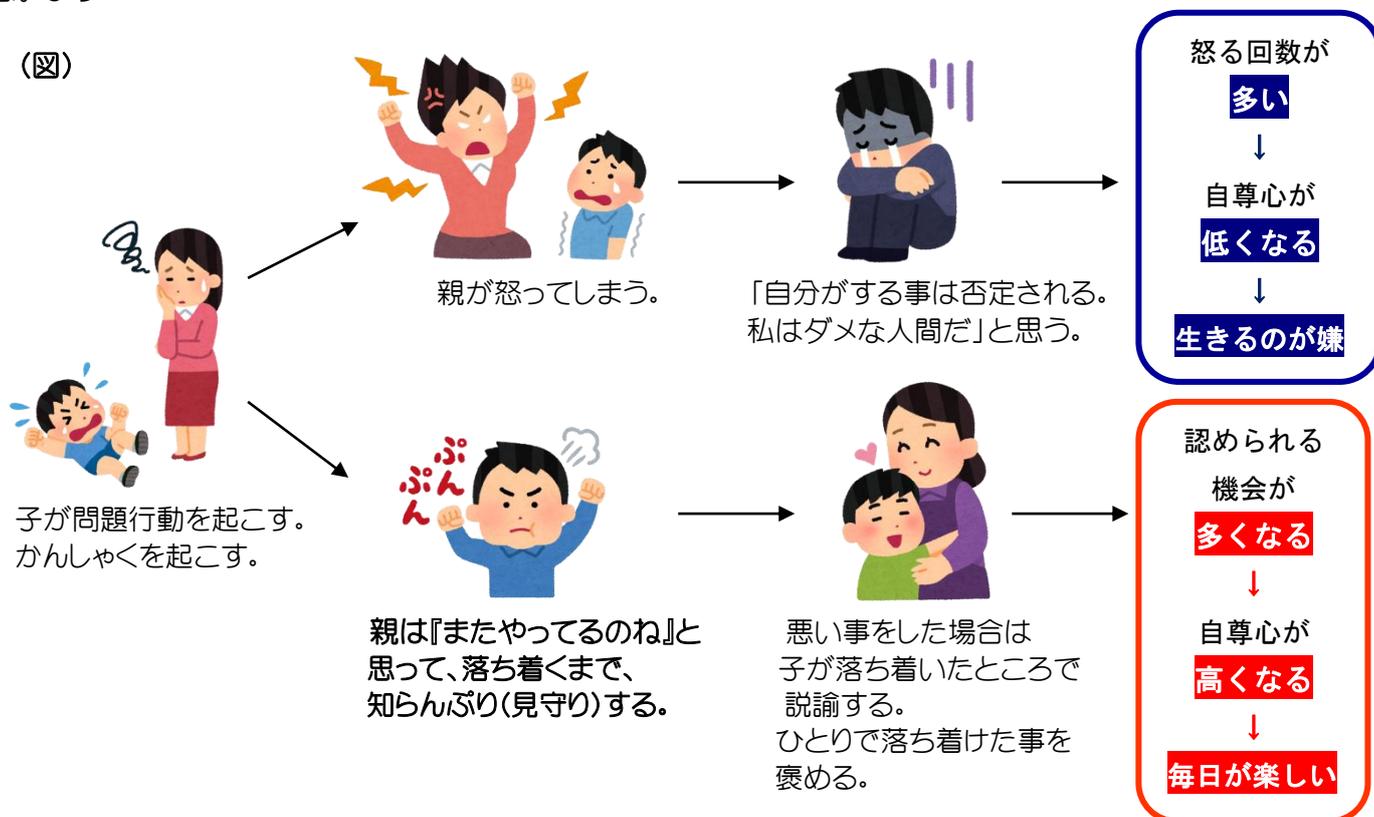
怒りのベクトル

怒りのベクトルが子どもに与える影響を図にしてみました。

ここで間違わないでほしいのは『怒る』ことと『説諭』することは違うということ。

子どもが間違った行動を取った時に『何も言わなくていい』ということではないことを留意してほしいと思います。

(図)



ささいなことで厳しく怒られて育った子どもは、怒られたことを直そうと思うよりも、『自分は何も出来ない。ダメな人間なんだ。』と受け止め、どんどん自信を失っていきます。自尊心が育たないうえに、親が思う『直してほしい部分』も直らない。親にとっても、子どもにとっても窒息寸前の関係です。

しかし、おおらかに『あ、またやってるな』と、子どもと距離を置いて見守れたなら、お互いにラクになれる。そしてなにより、子どもの自尊心を傷つけることはありません。

子どもの成長を止めるのも、促すのも、親の態度ひとつで変化していきます。10回のうち、1回は怒らずに見逃すことからスタートしてみませんか？

怒りをコントロール

怒りは『感情』です。特に真面目な親や先生ほど感情が波のように動き、コントロールするのが困難になる傾向があるそうです。一方、『特性』のある人は、相手の感情を読み取ることが難しく、頭で理解しようとする。つまり、こちらが感情で訴えても、子どもは頭で理解しようとするので、なぜこんなに怒られるのかが、まったく分からないわけです。

親子間で、こんな悲しい行き違いをしたまま、毎日を過ごすなんて、やるせないと思いませんか？

きっとあなたなりの怒りのコントロール法があるはず。探してみよう。

障害ではなく『特性』なんだ

石原先生が最も伝えたかったことの一つが『怒らないススメ』。そしてもう一つが、『発達障害ではなく発達特性として捉えてほしい』ということでした。

『障害』は診断名であり、グレーゾーンの人達は関係がないようにも聞こえます。『障害』という言葉は、はたして何に対して使われているのか？『障害』を作っているのは、周りの環境であって、特性のある彼らを指す言葉ではないのではないか？この講演会を通して、そんな事を考えさせられました。

人は人との関わりの中でしか生きていけない。あたたかな『まなざし』のある『関わり』のなかで、子どもは日々変わっていく。その力を信じて、二つのジリツ(自立・自律)を実現できるよう、関わっていきたくと切に思いました。

石原先生、貴重なお話をありがとうございました。



今回の『発達特性への正しい理解と子どもの育て方についての講演会』は学校と育友会・保体文化部が共催しました。

『発達特性』について、学ぶ機会をいただき、ありがとうございました。親、学校、地域で子どもを育てる。それは甘えではありません。困ったことがあったら、気軽に学校へ相談してみましよう。